

# 日本語の Tough 構文について\*

---

中 川 直 志

---

## 0. はじめに

英語の tough 構文については、(1)に示すような空演算子の移動による派生が一般的である。

- (1) a. John is easy to please.  
 b. John is easy [<sub>CP</sub> Op<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> PRO to please *t<sub>i</sub>*]].

主節主語の位置には John が基底生成され、不定詞節の目的語位置には空演算子が基底生成される。空演算子は顕在的に [Spec, CP] まで移動し、主節主語 John と同一指示の解釈を受ける。

本稿の目的は、tough 構文における日本語と英語の振る舞いを比較することによって、(1)のような分析が日本語の tough 構文の分析にも可能であるのかどうかを検証することにある。本稿で「日本語の tough 構文」と呼ぶのは、原則的には、(2)に示した“-にくい”タイプの構文の内、Type I である。<sup>1</sup>

- (2) a. Type I : 学生にとってこの辞書が使いやすい。  
 b. Type II : 最近私は寝付きにくい。  
 c. Type III : 木綿物が乾きやすい。  
 d. Type IV : エリートが強い挫折感を味わいやすい。

(Kaneko (1994 : 30-31))

タイプ I は、不定詞節内の目的語が主節主語に対応している点で他のタイプとは異なる。但し、不定詞節の主語が主節主語に対応する文でも、“-がち”で書き換えられないものは、本稿では tough 構文であるとみなす。<sup>2</sup>

(3) a. 新建材は燃えやすい。

b. \*新建材は燃えがちだ。

(Takami (1996 : 111))

(3 a)の“-やすい”は明らかに、難易度を表していると考えられる。

1節ではwh移動分析に典型的な現象を例にとって、日本語のtough構文が(1)のような分析に従う側面と従わない側面を持ち合わせていることを概観する。2節では、日本語のtough構文が(1)と平行的に派生されることを示すと共に、空所が深く埋め込まれた場合には、空の再述代名詞が現われていることを示す。3節は結論である。

## 1. 日本語と英語のtough構文

本節では(1)に示した空演算子のwh移動による派生を支持する、あるいは支持しない現象について、日本語と英語の比較を行う。

### 1.1 空演算子移動を支持する例

#### 1.1.1 長距離移動

英語においては、不定詞節の主語がPROである限り、空演算子の長距離移動が可能である。そして、この現象は顕在的wh移動と平行的である。

(4) a. John<sub>i</sub> is easy [Op<sub>i</sub> to convince Bill [<sub>t<sub>i</sub></sub> to arrange for Mary [<sub>t<sub>i</sub></sub> to meet <sub>t<sub>i</sub></sub>]]].

b. Who<sub>i</sub> did you convince Bill [<sub>t<sub>i</sub></sub> to arrange for Mary [<sub>t<sub>i</sub></sub> to meet <sub>t<sub>i</sub></sub>]]. (Inada 1989 : 83)

(5)に見られるように、日本語のtough構文においても、多重に埋め込まれた不定詞節内に主節主語に対応する空所が見られる。

(5) この種の本<sub>j</sub>が教師にとって [学生<sub>j</sub>に [PRO<sub>j</sub> e<sub>i</sub> 買う] ように <sub>t<sub>k</sub></sub>] 命 <sub>t<sub>k</sub></sub> にくい。 (Kaneko (1994 : 38))

#### 1.1.2 寄生空所の認可

(6 b)に見られるように、寄生空所は顕在的wh移動の痕跡によって認可されるが、<sup>3</sup> 英語のtough構文の空所も寄生空所を認可する(4 a)。

## (6) License of Parasitic Gaps

a. These letters<sub>i</sub> are tough to discard <sub>t</sub> [without opening [<sub>e</sub>]].

(Nakamura (1991 : 377))

b. Who<sub>i</sub> did they talk to <sub>t</sub> [after they met [<sub>e</sub>]] ?

(Mulder and Den Dikken (1991 : 313))

(6 a) のような文は日本語でも可能である。<sup>4</sup>

(7) このような手紙<sub>i</sub> が [<sub>e</sub> 開けないで] <sub>t</sub> 捨てにくい。

## 1.1.3 不定詞節の主語が空所になる可能性

顕在的 wh 移動(8)と異なり、tough 構文における空演算子移動(9)では、不定詞節の主語が移動することができない。

(8) What<sub>t</sub> was it hard for us [<sub>t</sub> [to believe [<sub>t</sub> [<sub>t</sub> to be accurate]]]] ?

(Haraguchi and Nakamura (1992 : 488))

(9) \*Bill<sub>i</sub> is hard [Op<sub>i</sub> to believe [<sub>t</sub> [<sub>t</sub> to be insane]]].

(Inada (1989 : 83))

これに対し、日本語では不定詞節の主語が空所になることができる。<sup>5</sup>

(10) a. 風呂敷は破れにくい。 (Takami (1996 : 101))

b. 新建材は燃えやすい。

(Inoue (1976 : 139)、Takami (1996 : 101))

## 1.1.4 目的語以外の要素が空所になる可能性

英語の tough 構文においては、不定詞節の目的語以外の要素が主節主語になることはできない。

(11) \*This way is impossible [Op<sub>i</sub> [PRO to learn the language <sub>t</sub>]]

(Contreras (1994 : 2))

これに対し、日本語の tough 構文においては、不定詞節の目的語以外の要素が主節主語になることができる。

(12) a. 正男にとってその郵便局からが小包みを送りやすい。

b. 花子にとって日本(で)が英語を話しやすい。<sup>6</sup>

(Kuroda (1987 : 235))

この点で日本語は英語の顕在的 wh 移動と平行的であると言える。

## (13) Where did you learn English ?

ここまで述べてきた事実は、空演算子移動による日本語の tough 構文の派生を支持するものと思われる。特に、1.1.3 節と 1.1.4 節で示した事実は英語よりも日本語のほうが、空演算子移動による派生にとって都合がよいことを示している。

## 1.2 空演算子移動に反する例

## 1.2.1 複合名詞句制約 (Complex NP Constraint)

日本語の tough 構文は複合名詞句内に空所が現われることを容認する。

- (14) この絵<sub>i</sub>が我々<sub>j</sub>にとって [PRO<sub>j</sub> [[<sub>DP</sub> [IP e<sub>k</sub> e<sub>i</sub> 描いた] 画家<sub>k</sub>] を t<sub>i</sub> 突き止め<sub>j</sub> にくい。

これに対し、英語の tough 構文における空演算子移動は、顕在的 wh 移動と同じく、複合名詞句制約に従う。

- (15) a. \*John is easy for us [Op<sub>i</sub> to describe to Bill [a plan [to assassinate t<sub>i</sub>]]].

- b. \*Who<sub>i</sub> did you believe [<sub>NP</sub> the claim [that you saw t<sub>i</sub>]] ?

(Kaneko (1996))

## 1.2.2 Wh 島からの抜き出し

英語の tough 構文における空演算子移動は、顕在的 wh 移動と同じく、wh 島を越えて移動できない。

- (16) a. \*John is easy to please a woman who likes (him).

(Lasnik and Fiengo (1974 : 555))

- b. \*What<sub>i</sub> did John wonder where<sub>j</sub> Mary bought t<sub>i</sub> t<sub>j</sub> ?

これに対し日本語の tough 構文では、wh 島内部に主節主語に対応する空所が現われることが可能である。

- (17) この手紙<sub>i</sub>が [誰が e<sub>i</sub> 書いたか] 突き止めやすい (事)

## 1.2.3 不定詞節からの wh 句の抜き出し。

英語の tough 構文においては、不定詞節から wh 句を抜き出すこともできない。これは不定詞節の [Spec, CP] が空演算子によって占められていることを

示している。

(18) \*What sonatas<sub>j</sub> is this violin<sub>i</sub> easy [Op<sub>i</sub> to play  $t_i$  on [ $t_j$ ]]?

(Haraguchi and Nakamura (1992 : 488))

日本語では(18)と平行的な文も容認可能である。

(19) どこで<sub>k</sub>この魚<sub>i</sub>が [PRO  $e_i$   $t_k$   $t_i$ ] 釣り<sub>i</sub>やすいですか。

1.2.1 節から 1.2.3 節で示した例は、日本語の tough 構文がいわゆる「島の条件」に従わないことを示している。島の条件に従うということは wh 移動の存在を示す強力な証拠であり、仮に空演算子移動説を採るならば、何らかの別の説明が必要となる。<sup>7</sup>

## 2. 日本語の tough 構文の派生

前節では、日本語の tough 構文が空演算子移動分析に従う特性と従わない特性の両方を持ち合わせていることを見た。それでは日本語の tough 構文はどのようにして派生されるのか。これまでの研究で提案されてきた仮説の中には次のようなものがある。

(20) a. 不定詞節内の要素が直接主節主語に移動する。

(cf. Inoue (1986, 1987), Kuroda (1987))

b. 主節主語は基底生成され、不定詞節内の空所は pro である。

(cf. Kaneko (1994)<sup>8</sup>)

c. 主節主語は基底生成され、不定詞節内では空演算子移動が起こっている。

本節では、日本語の tough 構文における空所の性質を明らかにすることによって(20 a,b,c)の妥当性について考えたい。

### 2.1 空所の義務性

英語の tough 構文においては、空所の存在が義務的であるのに対し(21)、日本語では空所が現われる位置に顕在的代名詞が現われることがある。

(21) a. \*This book is *tough* for the students to pass the exam.

(Mulder and Den Dikken (1991 : 305))

- b. \*This book is *tough* to read it. (ibid.)
- (22) この種の本<sub>1</sub>が教師にとって [学生<sub>j</sub>に [PRO<sub>j</sub> それ<sub>1</sub>を買う] ように t<sub>k</sub>]  
命じ<sub>k</sub>にくい。 (cf. (5))
- (23) この絵<sub>1</sub>が我々<sub>j</sub>にとって [PRO<sub>j</sub> [DP [IP e<sub>k</sub> それ<sub>1</sub>を描いた] 画家<sub>k</sub>] を  
t<sub>k</sub>] 突き止め<sub>1</sub>にくい。 (cf. (14))
- (24) この手紙<sub>1</sub>が [誰がそれ<sub>1</sub>を書いたか] 突き止めやすい (事)  
(cf. (17))

但し、代名詞が現われると容認性が低下する場合もある。

- (25) このような手紙<sub>1</sub>が [e<sub>1</sub> 開けないで] それ<sub>1</sub>を捨てにくい。 (cf. (7))
- (26) \*この本<sub>1</sub>が (我々にとって) [IP それ<sub>1</sub>を t<sub>k</sub>] 読み<sub>k</sub>にくい (事)
- (27) \*この種の任務<sub>1</sub>が [IP それ<sub>1</sub>を t<sub>k</sub>] 命じ<sub>k</sub>やすい。

ここで注目しなければならないのは、代名詞が現われ得るのは空所が深く埋め込まれた場合に限られるということである。特に、(23)と(24)は島の内部に代名詞が現われている例であり。これらの代名詞が現われている環境は再述代名詞のそれと平行的である。

- (28) the man who(m)<sub>1</sub> I don't believe the claim that anyone saw him<sub>1</sub>  
(Haraguchi and Nakamura (1992 : 414))

従って、(22)-(24)に見られた代名詞は再述代名詞であり、それが現われない場合にも空の再述代名詞があると考えられる。<sup>9</sup> これによって、wh 移動にかかる制約に違反している(5)、(14)、(17)の文法性も説明される。つまりそれらの文の空所は痕跡ではなく、代名詞の位置と考えられるので wh 移動にかかる制約はかからないのである。

それでは空所が深く埋め込まれていない場合はどうか。(25)-(27)で見たように、このような空所では顕在的代名詞が現われることができない。言い換えるならば、空所が義務的である。次節では空所が浅く埋め込まれている場合の *tough* 構文の派生について考察する。

次節に入る前に、埋め込みの“深さ”について暫定的に、次のように定義しておく。

- (29) 日本語の *tough* 構文において空所と主節主語の間に IP 節点が 1 つ以

上ある場合、空所は深く埋め込まれているとする。ただしその内部から述語が繰り上げられている場合を除く。

(29)の定義で(22)-(24)と(25)-(27)は区別できる。(25)-(27)では主節主語と代名詞の間にIPが1つあるが、述語が繰り上げられている。従って空所は深く埋め込まれておらず、代名詞は現われることができない。これに対し、(22)-(24)では、繰り上げられていない動詞を含むIPが主節主語と代名詞の間に介在しており、顕在的代名詞の出現が容認される。<sup>10</sup>

## 2.2 空演算子移動の証拠

2.1節では、空所が深く埋め込まれた場合とそうでない場合で性質を異にすることを見た。空所が浅く埋め込まれた場合も空の代名詞が存在するのであれば、(25)-(27)と同様に顕在的代名詞が現われてもいいはずである。先に、深く埋め込まれた空所が再述代名詞であると主張したが、もしこれが正しいとすると、浅く埋め込まれた空所はwh移動(tough構文においては空演算子の移動)の痕跡と考えるのが最も自然である。本節ではこの可能性について考察する。<sup>11</sup>

### 2.2.1 小節の補語の抜き出し

Postal (1994) は、英語の tough 構文における空所が代名詞的であることを示す証拠をいくつか挙げているが、それらは先に述べた wh 移動と平行的な例と共に、代名詞的要素すなわち空演算子が移動している証拠と捉えることもできる。というのは A' 移動の痕跡は移動した要素のコピーであると考えられるからである(cf. Chomsky (1995))。そのような証拠の内の1つが日本語にも応用できる。まず英語の例について考える。

- (30) a. Their son<sub>i</sub> would be impossible for them to name t<sub>i</sub> Ethelbert.  
b. \*Ethelbert<sub>i</sub> was impossible for them to name their son t<sub>i</sub>.

(Postal (1994 : 68))

英語の tough 構文においては、小節の主語が空所になれるのに対し、小節の補語は空所になれない。これは小節の補語に代名詞が現われないのと平行的である。

- (31) a. They named their son/him Ethelbert.

b. \*They named their son/it. (ibid.)

このような現象は日本語の tough 構文にも見られる。

(32) \*紳士<sub>i</sub> が(我々にとって) e<sub>i</sub> 彼を呼びやすい。

tough 構文以外の顕在的 A' 移動を含むと思われる構文では小節の補語が空所になることができる。

(33) a. 紳士<sub>i</sub> とは (TOPIC) 彼を t<sub>i</sub> 呼びにくい。<sup>12</sup>

b. 何と<sub>i</sub> あなたは彼を t<sub>i</sub> 呼ぶの。

(34) What<sub>i</sub> did you call him t<sub>i</sub>?<sup>13</sup>

以上の事実は、空所が義務的であるという事実を伴って、tough 構文が(例えば PRO のような) 何らかの要素の移動によって派生される可能性を示唆しているが、必ずしも空演算子の移動を示唆するものではない。例えば、小節の主語は受動文の主語にもなることができない。

(35) \*紳士<sub>i</sub> が我々にジョンを t<sub>i</sub> 呼ばれる。

もし、A 移動の痕跡が小節の補部位置に現われない、ということが一般的に言えるとすれば、<sup>14</sup> (32) も同じ理由で排除される可能性がある。

従って、日本語の tough 構文の浅く埋め込まれた空所が wh 移動によって派生されることを示す証拠が必要になる。

### 2.2.2 交差現象

英語において、顕在的演算子がそれに束縛される代名詞を越えて移動する場合、容認性が低下する。

(36) \*<sub>[CP</sub> Who<sub>i</sub> [<sub>did you say</sub> [<sub>CP</sub> he<sub>i</sub> made you visit t<sub>i</sub>]]].

(Lasnik and Stowell (1991 : 687))

(37) \*Who<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> does [<sub>NP</sub> his<sub>i</sub> boss] [<sub>VP</sub> dislike t<sub>i</sub>]] (ibid. : 689)

この内、(36) のように、演算子と痕跡の間に介在する代名詞が痕跡を c-統御する場合を強交差といい、(37) のように代名詞が c-統御しない場合を弱交差と呼ぶ。一般に強交差は弱交差よりも容認可能性が著しく低下するとされている。

Lasnik and Stowell (1991) は、顕在的 wh 移動でも空演算子が移動する場合には容認可能性が低下しないという。

(38) Which man<sub>i</sub> did you look at t<sub>i</sub> [<sub>Op</sub><sub>i</sub> [<sub>before his<sub>i</sub> wife had spoken to</sub>



$e_i$ ] (ibid. : 694)

(39) John<sub>i</sub> was hard [Op<sub>i</sub> [PRO to persuade his<sub>i</sub> boss [PRO to vouch for  $e_i$ ]]] (ibid. : 695)

(40) This book<sub>i</sub> was too obscene [Op<sub>i</sub> [PRO to have [its<sub>i</sub> author] publicize  $e_i$ ]] (ibid. : 696)

(38)は寄生空所を含む文、(39)は tough 構文、(40)は too...to... 構文の例である。いずれの文も弱交差を示しているが、容認可能性の低下は見られない。

日本語の tough 構文においても同様の現象が見られる。

(41) 正男<sub>i</sub>が[Op<sub>i</sub>[PRO<sub>k</sub>  $e_i$  信用するように]彼<sub>i</sub>の上司<sub>k</sub>を説得しやすい。<sup>15</sup>  
このことは日本語の tough 構文においても、空演算子の顕在的移動が存在することを示唆するものと思われる。ちなみに、(41)の「彼の上司」を「彼」に書き換えて強交差にした文(42)は、容認可能性が下がると思われる。

(42) \* 正男<sub>i</sub>が [Op<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub>  $e_i$  信用するように] 彼<sub>i</sub>を説得しやすい

### 2.3 日本語の tough 構文の派生

2.1 節と 2.2 節の議論から導かれる日本語の tough 構文についての結論は、次のようになる。

(43) 主節主語は基底生成され、空所の位置からは空演算子(代名詞的要素)が不定詞節の [Spec, CP] に移動する。空所が深く埋め込まれた時には顕在的代名詞、または空の代名詞が現われる。<sup>16</sup>

(43)に述べた派生は、(1)に示した英語の tough 構文の標準的派生と平行的なものであり、また、再述代名詞が現われる環境も英語におけるそれとほぼ同じである。<sup>17</sup> 従って、(43)は英語の分析との平行性を維持できるという観点からも支持できる。<sup>18</sup>

(43)は(20 c)に修正を加えたものであると言える。それでは(20 a, b)にはどのような問題があるのだろうか。本稿の視点から見ると、(20 b)は 2.1 節で論じた空所の義務性に対する説明が必要になる。また、(20 a)は、本稿で主張した再述代名詞の存在を仮定すると、主節主語が基底生成される場合(再述代名詞が現われる時)と、移動によって生成される場合の両方を仮定しなければなら

なくなる。

### 3. まとめ

本稿では日本語の tough 構文の派生法について考察した。日本語の tough 構文における空演算子移動は、1 節で示したように、英語の tough 構文における空演算子移動よりも自由で、より“wh 移動的”であるといえる。また wh 移動の制約に違反すると思われる長距離束縛も、日本語では空の再述代名詞が可能であることから、可能となる。<sup>19</sup>

### 注

\* 本稿をまとめるにあたって IVY 編集委員から貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

<sup>1</sup> (2)に挙げたタイプ間の相違については Inoue (1976, 1978)、Kaneko (1994)を参照のこと。

<sup>2</sup> これは Takami (1996) の判断に従ったものである。

<sup>3</sup> 一般的に、寄生空所は A 移動によっては認可されないが、まれに認可される場合がある (cf. Mulder and Den Dikken (1991))。

<sup>4</sup> 日本語では A 移動も寄生空所を認可できる。

(i) この手紙<sub>i</sub>が [<sub>e</sub> 開けないで] <sub>t</sub> 捨てられた (事)

従って、厳密には(7)は A' 移動を強力に支持する根拠とは言えない。

<sup>5</sup> (10)のような文を tough 構文と見なすかどうかについては異論がある (cf. Kaneko (1994), Kuroda (1987), Inoue (1976, 1978))。本稿では Takami (1996) の判断に従う。0 節を参照のこと。

<sup>6</sup> IVY 編集委員より、(12 b)は非文ではないかというご意見を頂いた。本稿では Kuroda (1987) の判断に従うこととし、最終的な判断は今後の研究に委ねることにする。筆者の直観では、「で」が現われた場合容認可能性が低下すると思われるが、そうでない限り、非文という程に容認可能性は低下しないのではないと思われる。注 19 参照。

<sup>7</sup> 英語の tough 構文における、wh 移動説の反例については、本稿では議論しな

い。

- <sup>8</sup> Kaneko (1994) は Tada (1992) に従うとしており、独自の議論は行っていない。
- <sup>9</sup> この種の代名詞は日本語の関係節にも現われる。  
 (i) これは [<sub>NP</sub> それ<sub>i</sub> を/<sub>φ<sub>i</sub></sub> 書いた男を] 知りたかった本だ。
- <sup>10</sup> (29)の定義は現段階では、tough 構文に対する個別的な記述である。従って、(i)のような使役構文において、代名詞の顕在化によって容認性が低下するという事実がどのように説明されるかは、今後の課題である。  
 (i) \*この本が (我々にとって) [?<sub>[IP</sub> それを子供に読ま] せ] にくい  
 但し、仮に(i)において最も深く埋め込まれた述語(「読む」)が主節まで繰り上がっているとすれば、(29)を使役構文にまで拡大して説明できる可能性がある。
- <sup>11</sup> 不定詞節内の要素が、直接、主節主語の位置まで移動する可能性については後で述べる。
- <sup>12</sup> (33 a)は「紳士」に主格が付与されておらず、「紳士」について叙述した文とは言えない(従って tough 構文ではない)。(33 a)は意味的には(i)と全く同一であり、話題化変形により派生されたものと考えられる。  
 (i) (我々が)彼を紳士と呼びにくい(事)
- <sup>13</sup> 英語の話題化構文では、小節の補語が空所になれない。  
 (i) \*Ethelbert<sub>i</sub>, I wouldn't name anybody <sub>t<sub>i</sub></sub>. (Postal (1994 : 69))  
 この事実は英語の話題化構文が、日本語の話題化構文と異なり、空演算子移動にとって派生されることを支持すると思われる。(cf. Postal (1994))
- <sup>14</sup> 小節の補語を主節主語にした受動文は英語においても容認されない。また、受動化によってできた NP 痕跡は代名詞とは考えられない。従って、(30 b)や(31 b)を排除した理由、つまり小節の補語位置に代名詞が現われられないという理由が(35)も排除するとは考えられない。
- <sup>15</sup> 本稿の定義に従うならば、(41)の文の空所は深く埋め込まれている。従って、(41)で移動の存在を証明することはできないと思われるが、(41)は島からの抜き出しではないので、連続循環的な移動も可能であると考えことにする。
- <sup>16</sup> 1.1.4 節で述べたような、目的語以外の要素が空所になる場合には、空の後置詞句に相当する空演算子を仮定しなければならない。また、(i)のような例においては空の再述代副詞のような要素を仮定しなければならない。その際問題になるのは、そのような副詞的要素が主節の名詞句に対応しているように思われることである。この問題を解決する1つの可能性としては、後置詞句に対する主格付

与を日本語において認めることが考えられる。そうすると、主節主語位置に現われる要素が後置詞句でもかまわなくなるので、空所または代副詞と主語の間の範疇の不一致が起こらなくなる。

上記の解決法が妥当かどうかは今後の課題である。但し、上記の問題に類似する問題が英語にも存在することを記しておく。

(i) a. For him to be top of the class is hard to believe.

b. \*I cannot believe for him to be top of the class.

(ia)の主語 (for him to be top of the class) は believe の目的語に対応していると考えられるが、元々その位置は for NP を伴う不定詞が現われ得る位置ではない。この例は tough 構文における主節主語と空所の間に、厳密な対応関係は必要ないことを示している。同様の事実を示す例は Postal (1994) にも見られる。

<sup>17</sup> 日本語では島の内部でなくても深く埋め込まれていれば、代名詞が現われ得る (cf. (22))。但し、そのような位置が空所である場合、空所は空の代名詞とも、移動の痕跡とも考えられる。注13参照。

<sup>18</sup> (19)では空所が浅く埋め込まれているため、空所は移動の痕跡と考えられる。その証拠に、(19)の空所に代名詞を補った(i)は容認不可能である

(i) \*どこで<sub>k</sub>この魚<sub>i</sub>が [PRO それを<sub>i</sub> <sub>k</sub> <sub>t</sub>] 釣り<sub>i</sub> やすいのですか。

もし、(19)が移動によって派生されるとすると、(19)は島からの抜き出しとして排除されなければならないはずである。しかし、この問題は不定詞節の CP が多重指定辞構造を成しているとするれば、解決できる。

(ii) \*どこで<sub>k</sub>この魚<sub>i</sub>が [<sub>CP</sub> <sub>t</sub>' [<sub>c</sub>' <sub>t</sub>' [<sub>c</sub>' C [PRO <sub>t</sub> <sub>t</sub> <sub>t</sub>]]]] 釣り<sub>i</sub> やすいのですか。

Chomsky (1995) の枠組みでは <sub>t</sub>' と <sub>t</sub>' は不定詞節の C から等距離にある。従って、(<sub>t</sub>'、<sub>t</sub>) の連結は最小連結条件に違反しない。日本語の CP が多重指定辞構造をとることは、(iii)からも明らかである。

(iii) [<sub>CP</sub> だれが<sub>i</sub> [<sub>c</sub>' どこで<sub>j</sub> [<sub>c</sub>' 何を<sub>k</sub> [<sub>IP</sub> <sub>t</sub> <sub>t</sub> <sub>t</sub> <sub>k</sub> したのか]]]]。

<sup>19</sup> tough 構文の容認可能性については個人間で差がある。これは日本語に限ったことではない。

(i) a. The girl was hard to convince John to marry

(Nanni (1980 : 571))

b. The problem is easy to expect to finish

(i)の例は Nanni (1980) 等によって容認可能と考えられているが、このような例を容認しない母国語話者もいる。

本稿では出典を示してある例文についてはその著者の判断に、それ以外の例文については著者自身の判断に従った。

### 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Contreras, Helles (1993) "On null operator structures," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 1-30.
- Haraguchi, Syosuke and Masaru, Nakamura (eds.) (1992) *Kenkyusha's Dictionary of Theoretical Linguistics*, Kenkyusha, Tokyo.
- 稲田俊明 (1989) 「補文の構造」、大修館、東京
- 井上和子 (1976) 「変形文法と日本語 (上)」、大修館、東京
- Inoue, Kazuko (1978) "Tough sentences' in Japanese," *Problems in Japanese syntax and semantics*, ed. by John Hinds and Irwin Howard, 122-154, Kaitakusha, Tokyo.
- Kaneko, Yoshiaki (1994) "Some topics in tough constructions," *Current topics in English and Japanese*, ed. by Masaru Nakamura, 27-51, Hituzi Shobo, Tokyo.
- Kaneko, Yoshiaki (1996) "On Tough constructions : A GB Approach," *Tough Constructions in English and Japanese*, ed. by Akira Ikeya, Kurosio Publishers, Tokyo.
- Kuroda, S. -Y (1987) "Movement of noun phrases in Japanese," *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, 229-271, Foris, Dordrecht.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo (1974) "Complement object deletion," *Linguistic Inquiry* 5, 535-571.
- Lasnik, Howard and Tim Stowell (1991) "Weakest crossover," *Linguistic Inquiry* 22, 687-720.
- Mulder, René and Marcel den Dikken (1992) "Tough Parasitic Gaps," *NELS* 22, 303-317.
- Nakamura, Masaru (1991) "On 'null operator' constructions," *Current English*

- Linguistics in Japan*, ed. by Heizo Nakajima, 345-379, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Postal, Paul M. (1994) "Parasitic and Pseudoparasitic Gaps," *Linguistic Inquiry* 25, 63-117.
- Tada, Hiroaki (1992) "Nominative objects in Japanese," *Journal of Japanese Linguistics* 14, 91-108.
- Takami Ken-ichi (1996) "A Functional Approach to the Tough-Construction," *Tough Constructions in English and Japanese*, ed. by Akira Ikeya, Kurosio Publishers, Tokyo.

## Synopsis

On *Tough* Constructions in Japanese

By Naoshi Nakagawa

In the GB framework, it is argued by a lot of linguists that a movement of of the null operator as in (2) is involved in the derivation of English tough constructions as in (1) :

- (1) John is easy to please.  
 (2) John is easy [<sub>CP</sub> Op<sub>i</sub> [PRO to please *t<sub>i</sub>]]*

The null operator (Op) is moved into the [Spec, CP] of the infinitival clause. This movement is a sort of A'-movement, and therefore, exhibits a number of phenomena which are parallel to the movement of overt wh-phrases. Some of these are as follows.

## (3) Long Distance Movement

- a. John<sub>i</sub> is easy [OP<sub>i</sub> to convince Bill [*t<sub>i</sub>* to arrange for Mary [*t<sub>i</sub>* to meet *t<sub>i</sub>]]]].  
 b. Who<sub>i</sub> did you convince Bill [*t<sub>i</sub>* to arrange for Mary [*t<sub>i</sub>* to meet *t<sub>i</sub>]]].**

(Inada 1989 : 83)

## (4) Complex NP Effect

- a. \*John is easy for us [OP<sub>i</sub> to describe to Bill [a plan [to assassinate *t<sub>i</sub>]]]  
 b. \*Who<sub>i</sub> did you believe [<sub>NP</sub> the claim [that you saw *t<sub>i</sub>]]] ?**

(Kaneko (1996))

(5) *Wh*-Island Effect<sup>4</sup>

- a. \*What sonatas<sub>j</sub> is this violin<sub>i</sub> easy [OP<sub>i</sub> to play *t<sub>i</sub>* on [*t<sub>j</sub>]]] ?*

(Haraguchi and Nakamura (1992 : 488))

- b. \*What<sub>i</sub> did John wonder where<sub>j</sub> Mary bought *t<sub>i</sub>* *t<sub>j</sub>*

The aim of this paper is to examine whether the same approach can be applied to Japanese tough constructions as in (6) :

- (6) Kono zisyo-ga gakusei-nitotte tukai-*niku*-i

this dictionary-Nom student-for use-difficult-Pres

‘This dictionary is difficult for the students to use.’

(Kaneko (1994 : 27))

In section 1, I will briefly review some peculiarities that cannot be shared with the overt A'-movement. In section 2, I will discuss the status of the gap in Japanese *tough* constructions. When it is embedded deeply, it is a sort of resumptive pronoun. When it is embedded shallowly, it is a trace of empty operator.